

吃音幼児における反抗期に関する予備的調査 (2)

—K・J法による反抗期の同定—

早坂菊子*・内須川 洸

反抗期の形態をK・J法によって12群に分類し、正常話児群と吃音児群間に反抗期の同定に差があるか否かを調査したところ以下の知見が得られた。

- ①正常話児群と吃音児群の回答は χ^2 検定によって有意差がみられなかった。
- ②正常前期群と正常後期群の回答にも χ^2 検定によって有意差はみられなかった。
- ③吃音児群は正常話児群に比べ、言葉による反抗が少ないとは言えないこと。
- ④反抗期に関する調査において重要な知見は、吃音児群が正常話児群と比較して、有意に反抗期が少ないが、その形態については特に差は認められないことである。

今後の課題としては、基礎資料とした2群の対象児の年齢構成の差のバランス、吃音児群と等質の年齢構成の正常話児群のデータを集める必要がある。また、吃音児群の群化を工夫することによっても、正常話児群との間に差が出てくる場合も予想される。上記の点をふまえて再度調査を行ない、吃音児と反抗期との関わりについて信頼性のあるデータを入手することを将来に期したい。

キーワード：反抗期 吃音幼児 反抗の同定 K・J法

1. 問題の所在

人格の発達過程において、両親をはじめ周囲の人々に対して、ことさらに反抗的態度をむける時期、すなわち第一反抗期（2才半から3才半）、第二反抗期（16才-18才）と呼ばれる2つの時期があると言われている（村田，1975）。第一反抗期は、子どもの自我意識の芽ばえのあらわれであり、周囲との葛藤の処理を通して、子どもは現実性、社会性を身につけていくと言われている。平

田（1981）は、この第一反抗期といわれるもののメカニズムについて図1の様にあらわしている。2才半位から出現すると言われる反抗期にもその反抗の形態は様々であり、拒否、抵抗から始まり、怒りによる反抗Ⅰ型（2-3・4才）、と失敗への不安による反抗Ⅱ型（3・4才-4・5才）のようにその発達段階によって、メカニズムも形態も異なることを指摘している。

筆者らは「吃音幼児における反抗期に関する調査(1)」(早坂ほか，1984b) (以下，調査(1))

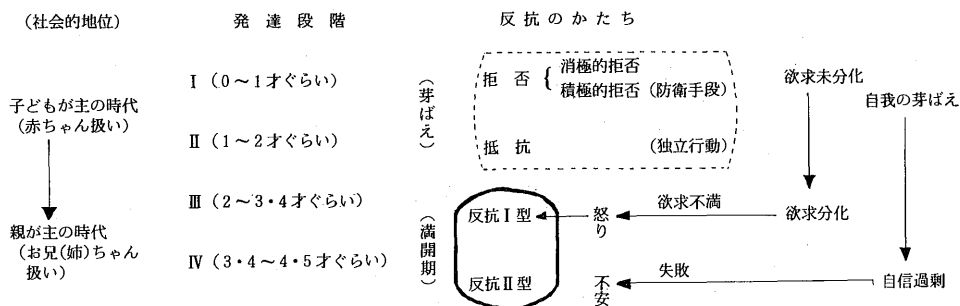


図1 反抗のメカニズム (平田慶子, 1981)

と記す)において、正常話児と吃音児の反抗期の出現頻度、出現時期についての調査を行なった。

調査(1)は、筆者らの臨床経験から吃音児にはいわゆる反抗期といわれる時期を通過していないと思われる症例に多く遭遇するところから、その実態を明らかにする目的で行なったものである。また、筆者らは近年、幼児吃音に関する臨床型の第4型、感情型吃音(内須川, 1982)に対する治療仮説として、Pendulum 仮説(振り仮説)を提唱している(早坂, 内須川, 1983 a, b, c)。この仮説に従って、治療を行なうと、幼児の行動は攻撃的となりそれがピークに達した後、非流暢性の軽減がもたらされるというものである。攻撃行動は、まず、行動的攻撃からはじまり、最後に言語的レベルにおける攻撃となってピークをむかえる。こうした動きが反抗期の存在、時期とどのように関わりがあるのか、また反抗期に表出される行動との関連性について、明確にすべき問題と考えられる。

さて、調査(1)によると、出現頻度においては、吃音児群と正常話群において、大きく差があることがわかった(図2)。また、その出現時期(反抗期の平均開始時期)はほぼ同じであり、有意差はみられないことが認められた(表1)。

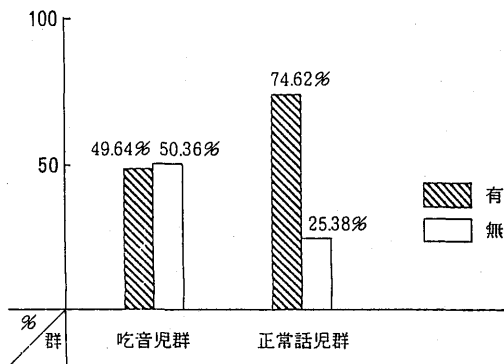


図2 吃音児群と正常話児群の反抗期の有無の比較

表1 吃音児群と正常話児群の反抗期の平均開始時期とSD

	開始時期	SD	t
吃音児群	3:7	14.95	t = 0.30
正常話児群	3:6	18.47	

しかしながら、各群の対象児の年齢構成に違いがみられ、こうした年齢差も結果に反映していることも考えられる。表2は正常話児群における年齢・性別の内訳、表3は吃音児群の年齢別内訳である。

さて調査(1)において、吃音児群と正常児群で、反抗期の出現頻度が異なることが示されたが、親が何を反抗期と考えたのかについて検討を加えなければならない。そこで、吃音児群において反抗期があると考えられたその反抗の形態が、正常話児群のそれと同じであるか否かについて検討することを本研究の目的とする。

2. 方法

(i) K.J法による反抗の形態の分類

①カードの作成

調査(1)によって収集した正常話児群264名の回答3(反抗期と考えた理由)をカードにぬき出した。文章、内容とも全く同一のものは除外し、内容は同じだが文章表現が違うものはカードに記入した。1人がいくつか理由をあげている場合、その全てを記入した。総数232枚のカードができた。

②K.J法による分類作業のメンバー

筑波大学大学院生2名と言語障害研究室生1名と筆者。

表2 正常話児群における年齢・性別の内訳

年齢	総数	♂	♀	不明
3才	27	9	15	3
4才	96	49	41	6
5才	99	47	45	7
6才	42	26	11	5

表3 突発型・緩発型の年齢別人数

年齢型	年齢						
	2才	3才	4才	5才	6才	7才以上	
突発型	1	3	6	8	10	33人	
緩発型	0	4	9	9	14	40人	

③分類方法

カード232枚を1枚ずつ筆者が読み上げ、メンバーが類似した内容と判断したものをグルーピングする。分類の判断基準はメンバー各自によるので、意見が一致しない場合、メンバー各員は自分の分類理由を述べ、議論しながら、グループとして納得のいく分類基準を作り上げるよう努める。このグルーピング作業を3回くり返した。

④分類

以上の手続を経て、12群に分類され、各群の呼称が決められた。さらにそれらを5つの群に分け整理したのが表4である。各群に含まれる反抗の形態の種類について、その多く回答された具体例を挙げると表5の如くである。

(ii) 調査(1)の対象者(正常話児群, 吃音児群)それぞれの回答を表4に従って分類集計し、2群間の対比を行なう。

表4 反抗期の形態による分類

I群 反発・拒否	Ia 「いや」と拒否する。
	Ib 親のいやがることをわざとする。
	Ic 反発(口答え, へ理屈)
	Id 拒否(言われたことの反対のことを言ったり, したりする。)
	Ie 内向的拒否
II群 自己主張意志を通す。	IIa 感情的主張
	IIb 自立の芽生え
	IIc 意志を通す。
III群 攻撃	IIIa 攻撃(言葉による, 揶揄, ひやかし)
	IIIb 攻撃(行動による)
IV群 欲求不満の解消行動	
V群 感情の不安定さ	

表5 反抗の種類(例)

Ia.	何ごとに対しても「ヤダッ」の連発/母親が～しなさいと言うと「ママやって」「やらないよ」「ママきらい」と言う。
Ib.	してはいけないと言ってある事をわざとしたりして何度しかってもきき入れない/悪いことだとよくわかっていて, やってみる。
Ic.	親が「～しなさい」と言うとき、必ず「だって」と言う/一回で「わかりました」と言わず, 理屈をつける。
Id.	命令されると「はい」と言わずに逆のことをする/おしつけてきなさいと言うと行かなくて, いかないでと言うと行く。
Ie.	呼んでも返事しない/すねる/ふてくされる/自分で納得できないことは無言で抵抗する。
IIa.	大声を出したり泣いたりする/自分の思うようにならないと声をふりしぼって泣く。
IIb.	手をかそうとすると「自分で自分で」と言って手をふりきる/干渉を嫌がる。
IIc.	言われたことに対して, 自分なりの考えがある時は, それを主張する/まちがっていることでも通したい。
IIIa.	親に対し「バカ」とか「あかんべー」/姉をからかったり, さからったりする。
IIIb.	自分の思うようにならないとすぐ手をあげる/気にいらないと親をたたく。
IV.	注意すると「フーン」としらばっくれて妹をいじめる/下の子を何となくいじめる。
V.	わけがわからず泣きわめくことがよくある/何をしても気にいらぬという感じだった。

3. 結果と考察

正常話児群, 吃音児群をそれぞれ反抗期出現の時期によって, 前期群 (3才6ヶ月未満) と後期群 (3才6ヶ月以降) に分けた。正常話児群と吃音児群, さらにそれぞれの前期群, 後期群において表4の分類に従って, 反抗期の同定に関する回答の度数について χ^2 検定を行なった。表6, 表7は各群の回数度数とパーセンテージを示したものである。度数の算定については以下の手続きを行なった。

調査用紙の「反抗期と考えた理由」について自由記述を求めて回答を得たもののうち, 1人1回答で, 回答の筆頭に述べたもののみにつき, 算定の対象とした。K.J法にて分類した各群に該当する回答があるかないか。筆者 (早坂) が判断した。

なお, 正常話児については, K.J法による分類の対象としてカード化をおこなったため, 筆者以外3名の判断に基いて行なわれた。対象とした吃音児のデーターは72名, そのうち該当する記述が行なわれていること, 吃音開始時期が明確に書かれているデーター63名分を選択した。正常話児のデーターは214名, 同様の条件にて選択した数は185である。

表6, 表7のデーターに基づき, 2×K分割表の場合のカイ自乗検定法にて各群間の回答分布の仕方の差を求めたものが表8である。これは, 表6に基づき, 吃音児群と正常話児群間にて χ^2 検定を行ない, 次に表7に基づき, ①正常前期群×同後期群間, ②吃音前期群間×同後期群間, ③正常後期群×吃音後期群間, ④吃音前期群×吃音後期群間

表6 正常児群と吃音児群の反抗期の形態分類に関する回答頻度数

	I a	I b	I c	I d	I e	II a	II b	II c	III a	III b	IV	V
正常群 n=185	21	9	73	26	18	9	5	12	2	3	4	3
%	11.35	4.86	39.46	14.05	9.72	4.86	2.70	6.49	1.08	1.63	2.16	1.63
吃音群 n=63	6	5	22	9	9	5	1	1	3	2	0	0
%	9.52	7.94	34.92	14.29	14.29	7.94	1.58	1.58	4.76	3.17	0	0

表7 正常児前・後期群と吃音児前・後期群の反抗期の形態分類に関する回答頻度数

	I a	I b	I c	I d	I e	II a	II b	II c	III a	III b	IV	V
正常前期群 n=113	18	6	41	16	10	6	3	8	0	2	1	2
%	15.93	5.31	36.28	14.16	8.85	5.31	2.65	7.08	0	1.76	0.9	1.76
正常後期群 n=72	3	3	32	10	8	3	2	4	2	1	3	1
%	4.17	4.17	44.44	13.89	11.11	4.17	2.78	5.56	2.78	1.38	4.17	1.38
吃音前期群 n=40	4	3	14	5	6	3	1	1	2	1	0	0
%	10	7.5	35	12.5	15	7.5	2.5	2.5	5	2.5	0	0
吃音後期群 n=23	2	2	8	4	3	2	0	0	1	1	0	0
%	8.7	8.7	34.78	17.39	13.04	8.7	0	0	4.34	4.34	0	0

表 8 各群間における反抗期の形態分類に関する χ^2 検定の結果

	正常群	正常前期群	吃音後期群
吃音群	$P > .05$ $\chi^2 = 11.40$ $df = 11$		
正常後期群		① $P > .05$ $\chi^2 = 12.17$ $df = 11$	③ $P > .05$ $\chi^2 = 6.65$ $df = 11$
吃音前期群		④ $P > .05$ $\chi^2 = 10.15$ $df = 11$	② $P > .05$ $\chi^2 = 1.68$ $df = 11$

①～④については文中に記してある。

にて、同検定を行なったものである。以上の検定により、次の結果が得られた。

これによると、吃音児群と正常話児群は、有意差はみられない ($\chi^2 = 11.40$, $df = 11$, $P > .05$)。また正常前期群と正常後期群においても有意差は認められなかった ($\chi^2 = 12.17$, $df = 11$, $P > .05$)。さらに、吃音前期群と吃音後期群では有意差はみられず ($\chi^2 = 1.68$, $df = 11$, $p > .05$)。吃音前期群と正常前期群、吃音後前期群と正常後期群についても有意差はみられなかった ($\chi^2 = 10.15$, $df = 11$, $P > .05$; $\chi^2 = 6.65$, $df = 11$, $P > .05$)。これから、吃音群と正常話児群において、反抗の形態の同定について差はみられないことが明らかになった。このように統計的処理においては有意差はみられなかったが、解答傾向についていくつかの知見が得られたので記述する。

(i) 正常話児群と吃音児群の対比

対象としたそれぞれの群の対象児数にバラつきがあり、また表 8 にて示した $2 \times K$ 分割表の場合のカイ自乗検定法によっては、各群間の回答分布の仕方の総体的な差のみしか得られなかったため、群間の対比をさらに次の方法で行なった。

反抗期の形態分類項目にそれぞれ該当する回答頻度を%に算定して、分類項目ごとの回答頻度の群間内の相対的差異を求め対比したものを図 3、図 4 にあらわした。これによると、正常話児群は I_c が多く、吃音児群は I_c と I_e が多い。すなわち、正常話児群は、口答えやへ理屈を言うなどの反発が多いこと、吃音児群は同じく反発が多く、また内向的拒否も多いことがわかる。吃音児群では内向的拒否が 14.29% みられるのに対し、正常話児群においては 9.72% と少ない。

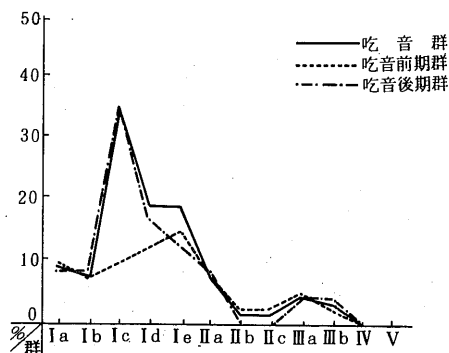


図 3 吃音群、吃音前期群・後期群の反抗の形態分類頻度 (%)

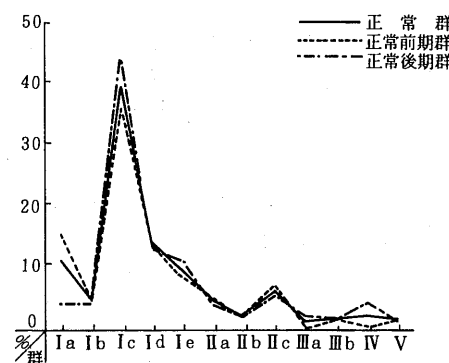


図 4 正常群、正常前期群・後期群の反抗の形態分類頻度

さらに、吃音児群に IV_b (行動による攻撃) が正常話児群より多くみられている (3.17% > 1.63%)。すなわち、吃音児群は正常話児群と対比して、言葉によらない反抗 (内向的拒否, 攻撃行動) がより多くみられることが示唆されているが、口答えやへ理屈など言葉による反発も多くみられていることもわかる。また、正常話児群では II_c (意志を通すこと) が、6.49% に対し、吃音児群では 1.58% と少ない。

これらより、2群間の回答分布 (すなわち反抗の同定の傾向) には違いが認められるものの、吃音児群の反抗が言葉によらないものが多いとはいえないことが示されている。すなわち、従来の吃音に関する研究と同様、吃音児群、正常話児群と 2 分する分類法では、その違いが相殺され、差異が明確に出てこなくなるものとも思われる。それ故、今後吃音児群を突発型、緩発型、或は発吃の時期に従って分類し、比較検討することも考え

るべきであろう。さらに、本研究のベースとなっている調査(1)における対象児の年齢分布の差、調査方法の妥当性(間接的調査研究であり、特に吃音幼児の場合、7才以上の対象児が多くその回答はretrospectiveな性格を有している)について検討を加える必要性が認められる。

(ii) 正常前期群と正常後期群の対比

(i)と同じく、分類項目に該当する回答頻度を%に算定して対比したものが図4である。

前期群においては I_a (15.93%)、すなわち、「いや」と拒否することが多いことが示されている。また、 I_c の反発も多いが(36.28%)、これは後期群において、44.44%とさらに多くみられている。また I_e (11.11%)の内向的拒否が前期群(8.85%)より多くあらわれていることが示されている。すなわち反抗期の時期が遅くなるにしたがって、言葉による反抗が一層増えていること、その一方で内向的拒否が増加する傾向があらわれてくる。

吃音前期群、後期群においては、 I_a 、 I_c は増加せず、 I_d (拒否:言われたことの反対のことを言ったり、したりする)が増加している(12.5%→17.39%)。しかしながら、正常話児群において反抗の形態の変化がより顕著であるに比し、吃音児群ではあいまいな印象となっている。

4. 結論

反抗期の形態をK.J法によって12群に分類し、正常話児群と吃音児群間に反抗期の同定に差があるか否かを調査したところ以下の知見が得られた。

①正常話児群と吃音児群の回答は χ^2 検定によって有意差がみられなかった。

②正常前期群と正常後期群の回答にも χ^2 検定によって有意差はみられなかった。

③吃音児群は正常話児群に比べ、言葉による反抗が少ないとは言えないこと。

④反抗期に関する調査において重要な知見は吃音児群が正常話児群と比較して、有意に反抗期が少ないが、その形態については特に差は認められないことである。

今回の課題としては、基礎資料とした2群の対象児の年齢構成の差のバランス、吃音児群と等質の年齢構成の正常話児群のデータを集める必要がある。また、吃音児群の群化を工夫することによ

ても正常話児群との間に差が出てくる場合も予想される。上記の点をふまえて、再度調査を行ない、吃音児と反抗期との関わりについて信頼性のあるデータを入手することを将来に期したい。

謝辞: K.J法によるカード分類作業にご協力頂きました、58年度言語障害研究室内地留学生、美才治真策先生、埼玉県立身体障害者福祉センター、スピーチセラピスト畔上恭彦先生、教育研究科生、堀田牧子さんに感謝申し上げます。

文 献

- 1) Crarchat, S. (1972) : The Emotional meaning of Stuttering. Edited by Yvan Lebrun Richard, H. Neurolinguistic Approach to Stuttering Proceedings of the International Symposium on Stuttering. Brussels.
- 2) Guntrip, H. (1971) : Psychoanalytic Theory, Therapy and The Self. Basic Books. 小此木啓吾・柏瀬宏隆訳(1982) : 対象関係論の展開-精神分析・フロイト以降・誠信書房.
- 3) 原俊夫・鹿野達男編(1981) : 攻撃性-精神科医の立場から。岩崎学術出版社.
- 4) 早坂菊子, 内須川洸(1983a) : 「突発欲求不満型幼児吃音に関する Pendulum Hypothesisに基づく治療過程——男児一症例の分析を通して——」, 心理臨床学研究, 1(1) : 41-53
- 5) 早坂菊子, 内須川洸(1983b) : 「環境調整法のみにて改善をみた突発型幼児吃音に関する症例研究——U仮説に基いて」第28回日本音声言語医学総会, 学術講演会予稿集, 72.
- 6) 早坂菊子, 内須川洸(1983c) : 「吃音改善における Pendulum Hypothesis の検討」日本特殊教育学会第21回大会発表論文集, 90.
- 7) 早坂菊子, 内須川洸(1984a) : 「突発欲求不満型幼児吃音児に関する Pendulum Hypothesisに基づく治療過程(2)——男児1症例の分析を通して——」音声言語医学, 25(3) : 233-242.
- 8) 早坂菊子, 内須川洸(1984b) : 「吃音幼児における反抗期に関する調査(1)——Pendulum 仮説と関連させて——」日本特殊教育学会第22回発表論文集, 378-379.

- 9) 早坂菊子, 内須川洸 (1984c) : 「突発欲求不満型幼児吃音に関する Pendulum Hypothesis に基づく治療過程 (3) ——社会性, 情緒性, 言語発達, 構音発達に遅滞のみられる男児 1 症例の分析——」第29回音声言語医学会学術講演予稿集.
- 10) 平田慶子 (1981) : 滝沢武久・柴田義松編「子どもが自立する時 / I 第一反抗期のころ」誠信書房. 25-50.
- 11) 広田君美 (1975) : 「子どもの攻撃行動と仲よし行動——その集団的, 社会的影響について——」教育と医学, 23 (11) : 66-73, 慶応通信.
- 12) 村田豊久 (1975) : 加藤正明他編「精神医学事典」, 540, 弘文堂.
- 13) 内須川洸 (1982) : 「講座言語障害治療教育」5, 吃音, 福村出版.

Summary

A Tentative Investigation on the Period of Negativism in Young Stutterers

(2) — Identification of negativism by means of K. J. Method —

Kikuko Hayasaka and Hiroshi Uchisugawa

The purpose of this study is to clarify whether there is a difference or not in the forms of negativism between the normal speech children's group ($n=289$) and the stuttering children's group ($n=99$) by means of investigation. The forms of negativism were divided into 12 items by the K. J. method on the basis of 234 replies for the questionnaires of investigation. χ^2 -square test between both groups were conducted in terms of the numbers of replies for the items. According to the results, the following findings were obtained.

1. There was no significant difference between the normal speech children's group and the stuttering children's one and between the normal speech children's group under 3 : 6 year old and the one after 3 : 7 year old.
2. It could not be assumed that there would be less verbal negativism in stuttering children than in normal speech children.
3. It is the most important finding that there are significantly less appearance of negativism in stuttering children than in normal speech children, but there is no difference in the forms of negativism between them.

We expect to find that there may be some difference between them, if we could divide the stuttering subjects into some kinds of groups from some points of aspects.

Key word: a period of negativism, early stutterer, identification of negativism, K. J. Method